

報告書

hikali



光が見えた。

激しい雨のヴェールの向こう側。

空から落ちてくる雨の粒がつぶてのようになって頭を、肩を絶え間なく打っている。俺は、立入禁止区域の最重要区画の端に突っ立ち、そのクレーターの縁で、フードから落ちる滴を見ていた。

視界のきかない絶望的な闇夜。

無力感が、狭っ苦しい夜の全てに思えた。

何もかもを否定するような、暴走を始めた巨大な建造物のうなり声に、化学繊維のフードがびりびりと揺れる。雨の喧しさに混じって、第一級管理区域を示す赤と黒のフェンスがガチガチと鳴く声が聞こえるのに気付く、自分の脚が臆病で震えているのではないのを知った。都市が振動している。

空きっ腹に響く鈍重な揺れを認識して、俺は、北の盛り場の馬鹿騒ぎで食いそびれたチキンと、生ぬるいビールのことを思い浮かべた。二日は錠剤以外は何も食っていない。薬で酷使し続けた身体が、つき続けていた嘘に気付いて悲鳴を上げ始めていた。

耐えがたい疲労感が闇と豪雨に閉ざされた世界を覆っていく。重くなった全身を支配する、氷塊のように限りなく透き通った灰色の予感を、俺は認めた。身体の奥底から音もなく流れ出すさむけに小刻みに身体が震えだす。

寒さにこわばった腕をレインコートの中に入れ、腰のベルトバックから、手に馴染んだ単眼スコープを取り出した。無意識のうちに顔にへばりついた水滴を拭き、素早くスコープをつけ、焦点を「彼女」に合わせた。

錯綜する幾条もの光線が、金属で造られた高さ数百メートルの山を照らしている。監視塔のサーチライトが、流線形の「彼女」の身体に数個の光円をすべらしている。その光の中に、もうもうと上がる湯気を見て、俺は第一種警報を鳴らした人間の判断の正しさを認めた。

この都市の惨めな暮らしを繋ぎ止めていたただ一つの命綱が、突然にその役割を放棄しようとしている。

「今度こそ、カオルが死ぬのか」

小さく呟く。

隣で相棒のタクが言葉を返せずに震えている。

車にへばりつき、銃をつきつけられた幼児のようにちぢこまっている。

俺はレインコートの雨水の溜ったポケットから片手を出して、タクの肩を軽く叩いた。びくりと反応を返すタクの脅えきった眼を横目で見て、いくぶん大袈裟に顎を動かした。

「……寒いな。一口でも飲んでくればよかった」

振り返りもせずに言う。

「こ、こんな非常時に……」

タクの語尾がどこかへ消える。俺はかじかんだ手に息を吐き、スコープを着けていない方の目をつむって、力なくにと口もとをゆがめて見せた。コートの下に白いセンターの制服を着込んだ生真面目な男は、ぶしつけな笑みに目をふせて戸惑った。

確かに、これほど大きな振動を起こして苦しむカオルの姿は、俺の記憶にも過去の記録にもない。かと言って、何か方策があるのかと問われれば出来ることが何もない事に気付く。見ているしかない。それが「監視者」にあてられた役割でもある。

(役目もこれで終わりか)

俺は、車のライトの中の飛沫をながめた。何人、何十人、出会った何百人もの表情と言葉が、人工光に照らされた雨のつぶてと一緒に弾け飛ぶ。

この都市がなくなれば、俺の居場所はなくなる。

それが彼女の監視に時間のほとんどを費やしてしまった自分の結末だ。

空を見上げて、はるか上空から次々と墜ちてくる雨滴を想った。長いのか短いかわからない空の旅を続け、最後には地面に墜落し、はじけ飛び、ほかの雨滴と混じって流れ去る運命の一滴たちだ。

(粉雪にでもなれば、華麗に痛みなく軟着陸できるのか?)

おかしな想像を笑う。くだらない感傷だ。雨は体温を奪う。それだけだ。それ以外に意味はない。

「逃げるか？」

タクの両目をしっかりと捉えて言った。

タクは〈センター〉の生え抜きだ。飛び抜けたエリートのくせに周りが見えない。閉鎖的な〈センター〉の視点でしか世界を見ようとしない。過去の知識を独占する〈センター〉の、弊害の典型である。

こいつを欲しがるところもないはずだ。〈センター〉の人間であることが唯一の救いだが、カオルの専門医に用のある連中は、とびきりのろくでなしばかりのはずだ。

「ど、どこへ」

自分のことなど眼中にないような顔で言った。

「さあ」

おかしくなって笑う。この男の関心は、カオルとそれに従属するこの都市にしか向けられていない。そのアンバランスな生真面目さが面白かった。タクが化け物を見るような目で、俺を見上げる。

ナオと名乗った老人のしゃがれ声と奔放なハーブの音色に浸っていた俺は、突然流れた秘匿警報の、今年初めての異常事態を告げる甲高いメロディーによって呼び出された。

百メートル先も見えない雨の中を、車を走らせ、幾重ものフェンスで嚴重に囲まれた彼女の近くまでやってきて、数少ない者にしか許されない最前列の特等席で、今まで聞いたことがないほど大きな呻き声をあげる彼女に直面した。

その苦しみに満ちた声の主は、広大な閉鎖区域の真ん中に穿った巨大なクレーターを居城にし、土砂降りに泡立つ暗い海に、黒く汚れた全長数百メートルの流線形を突き刺している。

周囲の無人監視塔から発せられる光線が、黒い海面からもうもうと立ち上る湯気とあつい雨滴の壁をつきやぶり、その八方にのびた太い電力ケーブルで地上に縛りつけられたカオルの全身を見尽くそうと執拗に、数個の光円をすべらせていた。

立ちこめる海と都市の臭いを嗅ぎ、俺は、カオルの下に沈む過去を思い浮かべた。連鎖的に思い出したビールの匂い、食欲をそそるチキンの香りに、ごくりと生唾を飲み込む。亡霊たちがいくら熱望しても決して手に入れることのできない楽しみだ。

(これが現実だ)

活力に満ちていたはずの幸せな過去を思って、毒づく。

徒労と絶望ですら、とるにたらない生の調味料だ。俺は小さくのどを震わせた。込み上げてくる愉快さが、重い身体を少しずつ軽くしていく。

今の都市に未練はなかった。チキンとビールと人があればいい。崩壊後の世界にはそれだけでも贅沢だ。南へ行くか、北へ逃げるか、それが唯一の問題だ。心残りはカオルの姿を拝めなくなるのか。

――打つ手なし。

俺は報告書に書くつもりの一文を脳裏で笑い飛ばした。

定形化した報告書の文面の中で、唯一意味のある言葉である。早急に〈カオル〉からなるべく離れた場所に十基のダムを造る必要があるとしたり、他の惑星にいる事にしてある五十年は音信不通の仲間の助けを待つしかないとするほうが、よほどファンタスティックだ。しかしそんな報告を書くには、俺の身体は冷たすぎた。

トップの連中が右往左往して、ヒステリックに怒鳴りあう姿が浮かんで来て、俺はそれを見ているしかない立場の自分を、冷え切った眼で見つめる。

俺たちは彼女に頼り過ぎたのだ。

彼女を信じ、彼女の恩恵を永遠に受け続けられると、何故か、思い込んでしまっていた。過去の遺物に縋り、それを再生する事しか頭になかった。

過去と現在は違うのだ。

星に渡れると信じ、それをやれるだけのエネルギーを持っていた時代は、時間という絶対的な隔たりの彼方にある。生き残った俺たちがそれをやれるようになるのは、少なくとも数百年は後のことなのだ。先ず、現在をつくらなければならない。それが分かる奴が少ないのは明らかに悲劇だ。

「もう終わりだ……」

タクが苦々しく呟く。

(少なくともカオルは終わりだ。俺たち二人の行方はまだ分からない)

タクはスコープを泥の中にぶちまけ、足で踏みつける。安くはないスコープが黒いゴム長靴に押し潰され、プラスチックと金属の破片になっていくのを俺は何も言わずにみつめた。

フェンスがその惨めな行為を無視するように、カオルに身を任せて揺れている。ペンキをぶちまけたような赤と黒のストライプが、軽快な音を立てる。タクは無心にスコープの残骸をすりつぶす。同情に値する行為ではある。知識の守護者たるこの男が、最も的確に現状の危機を悟っているであろう。

タクのヒステリーが標的を代え、嘲笑うフェンスを鉄屑にしようとしたところで俺はタクの軸足を払った。細い身体が倒れ、白衣が冷たい泥にまみれた。

タクが助手席におとなしく収まるのを待って、俺は唯一残ったシートー運転席に座った。静かな作動音をあげるエンジンをしばらく暖め、その待ち時間に煙草を吸った。

「僕にも、」

タクが煙に気付いて言った。渡すと慣れた手つきでフィルターをちぎって、火をつけ、忙しく吸う。しばらく互いに無言で、それぞれの考えに浸る。先に口を開いたのは、俺だった。豪雨は、静かな雨に変わっていた。

「見事なまでに、最悪だ」

「涙がでるほどに、に訂正したいですね」

細面に仄かな笑みを浮かべてタクが言う。煙を吸って落ち着いたのか、小さくため息をつく。痩せぎすの身体を両腕で抱き、寒さに震えている。その無造作に切られた黒髪から滴が垂れるのを、じっと見ていた。

カオルの気持ちを僅かなりとも理解しているのはこの男だけだ。他の者には記号と数字の羅列にしか見えないデータを理解し、彼女の仕組みを推測している。

中間のいない彼女の唯一の理解者とでも言えばよいのか。その男は、ようやくと熱をはきだしはじめたヒーターに両手をかざし、安心したように弱々しく微笑む。

「臨界点を超えています。このまま行けば、暴走しはじめることだけは間違えありません。外壁が振動したのは初めてです」

外国語に聞こえた。俺は曖昧に頷いた。

「しかし、暴走を始めた〈カオル〉がどうなるっていくのか、内圧が高まり第一隔壁を破裂させた衝撃に第二、第三の隔壁が持ちこたえる事ができるのか。それとも無秩序に反応し続け、外壁を破り、この辺りに汚染物質を撒き散らして高熱の中に消え去るのか」

淡々と話す。最悪の状況になるか、最悪の一步手前の準最悪に止まるのかという内容だ。

「凶面が残っていないのが残念です」

「残っていても同じさ」

タクが表情を強ばらせて俺を見上げる。

「あれは、俺たちの手に負えるものではないのさ。過去の人間の代物だ。本気で星へ行こうとした人間たちの遺品なのさ。崩壊後の人間に、しかもたった一人の人間に扱えるものではない」

（数十人という才能の集まりがあいつを囲っていたのだ）

「そうすると〈カオル〉を創った人たちを信じるしかありませんね。船には三基の〈カオル〉が積んであったという記述がありますから。あれは二号炉です。この呼び方は好きではありませんが」

ようやくと身体が暖まってきたのかタクは煙草をもみ消し、濡れたレインコートを無造作に脱ぎ捨て、シートの後ろにつっこんだ。

「数百年の旅に出ようとしていた連中の船です。最悪の事態は予想していたと見るべきです。そうすると、」

「今、俺たちが直面している危機を予想していた？」

タクが満足そうに頷く。

「もしかすると、しばらくしたら元通りになるかもしれません。三年前の調査で自己修復装置らしきものの存在も確認されています。第1207号資料に記載されていた、あれです」

タクが誇らしげに言った。

俺は煙草を揉み消し、濡れるのも構わず窓を開けて外へ捨てた。右半身が雨に打たれ、レインコートがびしょりと湿った。タクが驚いた表情で見る。

「煙たくてね」

やかましい雨の音に言葉を紛れ込ませた。ゆっくりと紫煙が車内から流れていくのを雨に打たれながら見ていた。

「悪いな」

窓を閉め、俺は小さく呟いた。

「昔から、娼婦は神様扱いされていたそうだけ」

しばらく雨が車のボディーを叩く音だけが聞こえていた。その妙な沈黙を破るように、俺はそう言った。その言葉にタクが驚く。

「娼婦？」

「カオルのことさ」

(犬にでもつけるような、適当な名前だ)

また煙草に火をつけ、吸った。彼女の名付け親——おそらく男だ——のことを、俺はぼんやりと考えた。

カオル。

惑星間戦争時代の確認されている唯一の生き残り、政府が極秘に建造していた他の恒星に渡る船の中枢部の片割れである。戦争の混乱の中で、質量爆弾として地球に落とされた。

パイロットのごく微量の機転と持ち前の強度で生き残り、船の破片により壊滅させられたこの都市を居城とした。どれだけの奇跡が彼女を守ったのかしれない。

空から舞い降りた奇跡に、飢えた俺たちはすがった。

マニュアルもエンジニアも残っていない。無尽蔵に吐き出される電力という恩恵によって俺たちは生き延び、理屈も分からずに彼女の周りに街を造り、生活を始めた。

(その二号炉を〈カオル〉とは……)

「イカした奴がいたもんだ」

タクが軽く首を振って、肩をすくめる。

「出すぞ」

サイドブレーキを下ろして、幾重ものフェンスに囲まれた彼女の住みかから車を出した。バックミラーの中で遠ざかっていくカオルを見ながら、ゆるやかに煙草の煙を吐き出す。間近で会えるのはこれが最後かも知れない。生まれた時から見続けていた彼女のすがたを、眼に焼き付ける。

カオルがどうなるのかは分からない。ぴたりと電力の供給を止めるのか、それとも苦しみとともに全てを巻き込んで消えるのか。

俺たちはいつの間にか彼女の顔色を伺いながら生きるようになってしまった。彼女を恐れ、彼女を敬って生きるようになってしまった。

彼女の落ちた場所には、その黎明期からこの国に君臨し続けてきた生き神の住居があったと言う。

(カオルが落ちるさまは、さぞかし壮観だったろう)

逃げ戸惑う過去の声が聞こえる。

閑散とした閉鎖区域を飛ばす。振りしきる夜の雨のスクリーンの向こう側に見たことのない過去の光景が明確に浮かんでくる。軽い酔いの中、俺は、ほんの数秒間に起こったやつらの世代交代を、夢想していた。

*

「ご苦労様。これはゆっくりと読ませてもらうよ」

監視委員長が言った。ヤニとコーヒーの臭いが、その狭いガラス張りの個室に飽和していた。床に沈殿物でもこしらえたいのか、委員長は新たな煙草に火をつけ、深々と吸って、天井に吐きつける。

それから、利かなくなっただけの鼻をひくひくさせて、しばらく黙った。手には俺の報告書が乗っている。

俺は一刻も早く帰りたかった。薬の持続時間がそろそろ切れる。身体が耐え難い疲労感でいっぱいだった。疲れた頭の中では辞職届けの文面が踊っていた。俺の報告書を読めば、だれもがカオルの側を離れるだろう。カオルの街だ。だれも、迷いはしまい。他の連中はどうするのだろうか、俺は考えていた。飲み仲間の顔が浮かび、仕事仲間の顔が浮かんだ。誰もがはじけ飛ぶのだ。はじけ飛んだ後の事はそれから考えればいい。

委員長はほとんど吸っていない煙草をもみ消し、それから不思議そうに、用紙十数枚の報告書を見る。下着のカタログを見るようにべらべらとめくる。

「ふしぎだな、雨の匂いがする。そう思わんかね」

何も答えられなかった。そのまま一礼をして、部屋を出た。

重くなった身体を引きずりやつのことで駐車場に辿り着き、車を出した。

家路へと向かう道路を走る。

一一雨の匂いがする。

委員長の言葉が鮮明に焼き付いていた。

(当たり前だ)

苛立ちまぎれに、クラクションを鳴らす。けたたましい騒音が街に響いた。

(飛沫の底で書いたのだから)

むしように煙草を吸いたくなかった。箱は空だった。

<了>